

令和5（2023）年11月1日

第3回 東京グリーンビズアドバイザーボード

【佐久間計画調整部長】

それでは定刻になりましたので、第3回東京グリーンビズアドバイザーボードを開催いたします。

今回はオンラインを含め8名の委員の皆様にご出席を頂いております。本日はお忙しい中ご出席いただき、誠にありがとうございます。司会を務めさせていただきます、政策企画局計画調整部長の佐久間でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日のスライド資料は、お手元のタブレットからご確認ください。

なお、政策企画局長の古谷は本日、公務の都合により欠席させて頂いております。次長の木村が出席させていただいております。

それでは、開会にあたり政策企画局次長の木村よりご挨拶申し上げます。

1. 委員紹介及び挨拶

【木村政策企画局次長】

政策企画局次長の木村と申します。

ただいま事務局の方からご案内ございましたように、局長の古谷は公務がございまして出席ができませんので、私が代理で進めさせていただきたいと思っております。

まず本日は東京グリーンビズアドバイザーボードの第3回目の会議となります。お忙しいところお集まりいただきまして誠にありがとうございます。

前回第2回の会議では、これから100年を見据えて、東京の緑に必要なことをテーマに、5人の皆さまからそれぞれご専門でございます、農業、土地づくり、植物生態あるいはグリーンインフラ、ESG投資など専門的見地から様々なプレゼンテーションをいただいたところでございます。

プレゼンテーションの後には、皆さまから知見を踏まえながら活発な意見交換をいただいたところでございます。プレゼンの振り返りについては、後ほど資料にもございますのでご覧いただければと思っております。

その中で、もっと広く一般都民や、あるいは若者の声なども聞く機会を設けるべきだというご意見も頂戴いたしました。このため都では、東京の緑に関する都民アンケートといたしまして、各種イベント等において子どもや大学生のアンケートを実施しているところでございます。

今回は酒井委員、下村委員、渡部委員よりプレゼンテーションを行っていただく予定でございます。

委員の皆様からのご意見・ご提案を取り入れて、施策の強化を行い東京グリーンビズ、丁度ポスターを周りに貼ってありますけれども、その東京グリーンビズの旗印の元に「みどりと生きるまちづくり」を進めてまいりたいと思っております。

ぜひ忌憚のないご意見をいただければと存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

【佐久間計画調整部長】

続きまして委員のご紹介に移らせていただきます。

今回初めてご出席いただきます渡部翠様から簡単に自己紹介いただければと存じます。よろしく願いいたします。

【渡部翠委員】

ありがとうございます。

皆様はじめまして、渡部翠と申します。

株式会社ユーグレナの三代目チーフフューチャーオフィサー（Chief Future Officer）、最高未来責任者として活動しています、16歳です。

最高未来責任者というのは、株式会社ユーグレナと並走しながら、企業を通して起こせる活動を考え、社会に対してプラスのインパクトを作るために何ができるかということを考え、実行するメンバーです。

活動していないときは、普通に高校生として寮生活を送っています。よろしくお願い申し上げます。

【佐久間計画調整部長】

ありがとうございました。

なお、本日伊藤委員は欠席でございます。

本日は委員の皆様のご協力いただきまして、実りある議論をしていただければと存じます。よろしく願いいたします。

2. 東京都の取組

【佐久間計画調整部長】

それでは次の議題に移ります。

(P.2)

本日はまずお集まりの皆様にご紹介させていただきます。

まず、前回頂戴いたしました主な意見の振り返りをさせて頂き、その後、第二回会議以降の東京都の取組についてご紹介させていただきます。

(P.3)

まず3ページでございますが、まず前回の振り返りです。

これからの 100 年を見据え、東京の緑に必要なことをテーマに 5 名の委員から農業、都市づくり、植物生態、グリーンインフラ、ESG 投資の観点によるプレゼンテーションをしていただきました。

具体的には、「相続税の物納要件を緩和し、物納された農地や山林を自治体に長期貸与して福祉農園など新しい形の社会政策を展開すべき」

「例えば、ニューヨークのツリーマップのように情報の見える化、市民参加により自分事化して行くべき」「広場や公園などの防災空間には、地域の樹木を使った防災が必要」

「緑を 1 つのインフラとして捉え、その機能をしっかりと評価していくことが重要」

「ESG ファイナンスは世界的にも拡大しており、環境保全につながるグリーンボンド等も発行されている」など、先生方の各専門の分野から様々なご提案をいただきました。

(P.4～5)

また、その後の意見交換の中でも、「屋敷林は歴史の積み重ねであり、地域を守り抜いてきたことを考えれば、公有地化したり、災害時には仮設住宅などを設置する場所にするということで、日頃からの税金を減免できないか」という提案や、「CO2 や気温のコントロールだけでなく、もっと緑の価値について様々な評価ができる仕組みがあると良い」ということ、先程次長挨拶でありましたが、「もっと広く一般都民や若者の声なども聴く機会を設けるべき」といったご意見も頂きました。

これを受けまして、次のスライドに示す通り、東京の緑に関する都民アンケートとしまして、各種イベントなどもこの秋結構ございますので、そういう場を持ちまして、子供や大学生のアンケートを実施させていただきました。

(P.6)

今後は東京都世論調査としまして、都民 4,000 人に東京の緑に関する意識調査を実施するほか、緑の保全活用で自分たちが取り組みたいことなどに関しまして、若者からもプレゼンテーションをしていただける場などについても検討して参りたいと考えてございます。

委員のみなさまのご意見に加え、様々な機会を捉え、更に幅広い都民の皆さんのご意見を取り入れて、政策を強化し、バージョンアップしてまいりたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

3. 委員によるプレゼンテーション

【佐久間計画調整部長】

次に委員の皆様のパレゼンテーションに移りたいと思います。

前回に引き続きまして、これからの 100 年を見据え、東京の緑に必要なことを全体のテーマと致しまして、各委員の専門分野からご発表いただきたいと思ひます。

本日は酒井委員、下村委員、渡部委員の 3 名の議員から発表いただきます。はじめに酒井委員からご発表いただければと思ひます。どうぞよろしくお願い致します。

【酒井秀夫委員】

ご紹介いただきました酒井です。それではさっそく入らせていただきたいと思います。

(P.1)

私の役割は林業の部門です。

(P.2)

東京都の林業に詳しいわけではないので、都が出しています「東京の森林・林業」から、読み解いてまいりたいと思います。

下に資源状況が書いてございますけれども、1ヘクタールに209立方ぐらいの蓄積、それから毎年1ヘクタール当たり2.3立方、順調に育っている。一言で言えば、これらが眠っている資源でどう活用するかということかと思えます。

(P.3)

これは、上は素材生産量、伐採量です。昔はずいぶん伐っていました。今はそれほど伐っていないですけれども、どういうところで伐っているかといいますと、赤丸で書いていますが、16ヘクタールの皆伐、でも1ヘクタールから430立方位伐っていますので、かなり立派な木が伐られているのだなと思えます。

それから間伐を進めているということです。これはCO2対策もあって、間伐に力を入れているのかなと思えます。昔はずいぶん伐っていた部分が造林をされ、この造林をした苗木が今になって育っているという状況です。

(P.4)

これは保育です。伐った後、植えるのですけれども、花粉症対策で皆伐したところに造林している。それで、一度植えますと下刈ですとか除伐ですとか手入れをしていかなければいけないのですが、それが下の赤い丸です。

これから皆伐して植えるのはいいのですけれども、植えたらその分、面倒を見なければいけない。では、その人材をどう確保するのかというのが大きな課題になってきます。これをうまく課題解決しないと植えたのは良いけれど、育てきれないという、今までの日本林業の二の舞になりかねないです。

(P.5)

これが先ほど、昭和30年代、40年代一生懸命植えた木が育ってきたところですが。年齢級でございますが、これは林業の用語で、5倍すると歳になります。10年齢級ですと50歳、15年齢級ですと75歳ですから、昔切ったところに植えたのが大きくなって成熟しているわけですね。

これをどういうふうにもう資源利用して行くかということです。単に伐るだけでなく、公益的機能の発揮をどうするかということだと思えます。

(P.6)

東京都の地形地質です。私は地質の専門家ではないのですが、日本列島の地質を見ますと、非常に複雑です。北米プレートとユーラシアプレートが山梨県長野県でぶつかっていて、そこにフィリピン海プレートが乗り上がっている。人間で例えれば脇腹を突っつかれているところに東京都が少しかかっています。神奈川の丹沢とか、非常に崩れやすいところかなと思います。

ここを拡大してみます。

(P.7)

これが東京都の地質です。下がいわゆる四万十帯で、北側が秩父帯、そして間を仏像構造線という大きな地殻変動の後にできた破砕帯が通っているわけです。

(P.8)

写真を見ますと上が秩父帯です。埼玉の秩父に由来する名前です、下が四国に由来する四万十帯です。秩父帯というのは1回海底に堆積していましたので、土がさらさらしていますので、スギの生育に良い。吉野とか天竜とか秩父とか、スギの産地です。大昔からさらさらしていますので、大規模な地すべりが起きているわけです。

右が日の出町で、つい先週行ってきましたけれども、大昔からの地滑りの跡がよく見えます。それから四万十帯は尾鷲のヒノキとか林業地が多いですけれども、地層が傾いているということで受け盤側は道作りにはいいですが、流れ盤側は大きな昔からの地滑りがある。特に怖いことはないですけれども、ここに上手にどう道を入れていくかということです。それぞれ道の入れ方がございます。間に仏像構造線というのがあるのですが、南アルプススーパー林道にもあります。非常に崩れやすいので、ずいぶん昔から難儀していたところなんです。驚かすようですが、ここにどうやって道を入れてインフラ整備していくかということです。

(P.9)

間伐の時期を迎えて、5年前に撮った写真ですが、まだ機械も小さい、道も狭いということの間伐の対応をしていました。

(P.10)

先週、ご案内していただいたのですが、主伐、皆伐です。主伐というのは目的に達したということで、花粉症対策で皆伐しているのですが、タワーヤーダというタワーを立てて、ここにワイヤーロープを張って大きな木材をもってくるのですけれども、これを見せていただきました。

1日で線を張れるということで、急峻なところで能率のよい仕事ができる。持ってきた木の先に枝がいっぱいついています。これはバイオマスで使える。

林地に枝とか捨ててこないのが、植え付けも楽になる。

(P.11)

木が太くなってきました。左が森林総研の松村さんの論文ですが、直径24センチぐらいのスギですと非常に柔らかくて、ヤング率が小さい。曲げに弱いので横架材、梁に使え

なかった。スギとしては、人間に例えれば中学生とかその位で切られているので、柔いのはしょうがないですが、36センチになると木というのは周辺が硬くなりますので、周辺から板が取れます。そうすると床とか天井の横架材、根太と言いますが、ここに使えるようになってきます。

左下の林業白書に書いてあるのですが、オレンジ色の部分は外材です。緑色のところ、国産材が少ないのが横架材です。スギは強度がないということで、外材に頼っていたわけですが、木が大きくなってくると外材のシェアを奪っていけるので、これからこの太ってきた材をいかに上手に板にして行くかということになると思います。

(P.12)

これは先程の東京都の資料ですが、都の持っている林と私有林、それと人工林。この私有林と公有林の人工林はそれぞれ戦略が違うのかなと思います。

(P.13)

主伐には全部切って新しくリセットして植えなおす皆伐と、太い木だけ、あるいは寿命が来た木だけを抜いていく、択伐というのがあります。どちらがいい悪いということではなくて、それぞれ理由をつけて、伐っていけばいいわけですが。それからやぶになっているところを1回りセットする皆伐というのもございます。

下の写真は繰り返し間伐していくと、だんだん木が太くなって行って、いい材が取れていく。それから空間も空いていくというようなことで、森林が高齢化していけば、こういう下の写真が理想かなと思います。日本ですと吉野林業がこういう形です。吉野林業を目指すというわけではないですが、そのサンプルとしての写真です。

(P.14)

柱材が取れるということで皆伐したのですが、柱になった木は3割ぐらいしかなかった。細い木は安く買ったたかれた。太い木はもうちょっと置いておけば高く売れたのということです。4メートルの長さで直径22センチと26センチ、年輪を4センチ、片側2センチ増やすことによって、その丸太のボリュームが3割ぐらい増えるということで、やはり辛抱しておいておくといいますか、どの段階で伐るかというのは非常に大事だと思います。

大面積の所有者さんですと皆伐した方が出すコストが安いので、それなりのメリットがあるのですが、また植え直して育ててという下刈りして除伐してとなると、非常に手間がかかっていく。

トータルコスト的にいいのかなということです。搬出コストは安かったかもしれないけれども、売上はどうだったのかなということです。右側は梁に使えるような材木です。

(P.15)

植え直すとする、苗木と植え付けとそれから地拵えに非常にコストがかかって、これを今の材木の値段でどう賄うかというのが大きい課題です。

(P.16)

そうすると択伐という考えもございまして、森林が歳を取ってくると、縦軸の成長量が落ちてくるわけです。Aという段階で少し伐ってあげて、Bという段階に戻して、この黒い太線内で繰り返して伐った部分を使うということです。

皆伐が、預金を全部下ろして、また貯金をし始めるという例えに対して、これは利息分だけを下ろしていくということです。うまく更新ができれば植えない林業ができます。下刈りしなくていい。これは小規模の所有者さんの団地を作るとか、あるいは部分的に小さい皆伐とか、群状択伐とか、そういう切り方があるのかなと思います。

(P.17)

上の写真が択伐の例ですけれども、太くなった木、あるいは目的の木を伐り出す、それから100年というスパンで社会が変わる中で製品の価値はお客さんが決めていく。その時に、木の育て方は変わらないですが、社会に応じて、内面的にどう対応していくかということ、その時の林業の形というのを議論しなければいけないということです。

それからやはりゾーニングが大事です。どういう風に扱っていくかということですね。公益的機能を発揮するのか、間伐を繰り返して行くのか。時間軸と空間軸の長期ビジョンが大事です。市民の方にも森林を利用してもらう。山に親しんでもらうということですね。いずれにしてもタフな山を作っていきたいということです。

(P.18)

これは東京都のプランです。赤線を引かせてもらいましたが、目指すべき森林の姿を具体的に見えるように示さなければいけないですが、ではそれをどういうふうに示していこうかということで話していこうかと思います。

(P.19)

これはフィンランドの例です。それぞれステークホルダー、プレーヤーがいて、産業クラスターです。それがハブ、あるいはプラットフォームを形成して、この間でいろいろやり取りする中でどう化学反応を起こすか。

東京都もこの指止まれということで、みなさん集まってもらってクラスターを作って、ここに情報をどう流すか、それから動いていくには、やはりお金の流れが要るわけです。そういったファイナンスをどうするか。お金が潤滑油になるかと思うのですが、幸い森林環境譲与税というのがありますので、そういったものを基金にして、うまくファイナンスをしていければと思います。この辺がまだできてないかなと思います。

(P.20)

フィンランドは公共建築の3割が木造で地元材を使っています。重い木材を運ばないということです。なるべく地元で使っていく。右が学生寮で、表はコンクリートですけれども、中はCLTとか集成材です。中は木造になっています。こういったことがどんどん増えていけばいいのかなと思います。

(P.21)

これは竹中工務店さんが作ったフラッツウッズ木場です。だんだん建築基準も変わっていくと思うのですが、高層化されていくということですね。こういったサンプルも出てきたということです。

(P.22)

先週、多摩産材を見せてもらいました。惚れ惚れするような板です。これは天井板ですが、遠赤外線で低温乾燥して、香りも脂分もそこになっていない。高温乾燥するとどうしても油が抜ける、色が黄色っぽくなっていくということですが、どうやって木の良さを出して付加価値をつけるか。それから大事なのは健康志向です。

健康志向は色々な話がありますので、公共建築物ですとか、人が集まるところに使ってもらう。これは天井板ですけども、オフィスですとか、マンションの内装材に非常にいいのかなと思います。このことを都民の方によく知ってもらいたい。

(P.23)

この前見せてもらったのですが、右の写真はストックです。特に売り先があるわけではないですけども、何か急な用ができた時のためということです。

林業の最大の欠点は山から消費者さんまでのリードタイムが長いということです。伐って運び出して乾かして板にして、どうしても2カ月3カ月はかかってしまう。急な対応や需要に応えられない。

先ほどの大型の建築物を作るときに材料を集めるのに何年かかかる。それから需給調整がうまくできていなくて、価格の乱高下があるというのは、林業の欠点ですが、先ほどのクラスターで強固なサプライチェーンを作って、ビジネスパートナーを見つけていただいて、さまざまなサプライチェーンができてくればいいのかなと思います。これは最後にお話します、少ない労働力の通年活用とかにつながると思います。

それから在庫は売れ残りではなく置いておけば価値が上がりますし、時を味方にして売り時に売ればいいと思うのですが、その時やはりファイナンスをどうするか、基金をどうするかということです。

災害時に対して、モバイル型のプレハブを用意しておいて、普段は非住宅として使っていて、何かあれば災害時に供給しようというようなことで、取り組みをする必要があるのかなと思います。労働力を活用して雇用を安定することも非常に大事かなと思います。

(P.24)

上は東京都の絵ですが、データセンターです。これをオープンデータにして、いろいろなベンチャーの方に利用してもらって、森林経営計画にうまく役立ててもらい、効率的な計画によって森林資源の利用をして頂ければと思います。

(P.25)

最近こういう事例が出てきました。山にチップが入ってきてチップにできる。これは燃料に使われるわけですが、小さいトラックで運んでいては遠くに運べないので、左下の

ようなプラットフォームを作って品質管理をして安定した品質の燃料用チップをもっていく。真ん中はイタリアのビール工場ですが、燃料にチップを使うとか、薪のデリバリーをするとか。バイオマスの利用は化石燃料に代わってCO2の吸収ということがあるのですが、その前に居住空間の快適性というのがあります。床暖房、きれいな空気、それから快適性です。

今インターネットで情報は郊外でも取れるのですが、郊外に行くところといったチップとかペレットを使って快適な居住空間を享受できるということです。木質資源も有効に使えばと思います。

(P.26)

最後になりますが、街路樹も結構いい資源だなと思います。向かい合わせに木を植えてしまったので、枝打ちが大変で、なぜ互い違いに植えなかったのかなと思うのですが、こういったものを高所作業で切ってすぐチップにかけてチップにして持っていければ、有機肥料や燃料とかに使えるかなと思います。

(P.27)

どう林業に携わる人を増やすかというのが大事で、林業従事者が減っているところですけども、どうやって魅力ある林業にして人材を確保していくかというのが大事かなと思います。

以上で発表を終わらせたいと思います。どうもありがとうございました。

【佐久間計画調整部長】

ありがとうございました。続きまして下村委員お願いいたします。

【下村彰男委員】

下村でございます。今日は、人と緑の共生に向けて～ランドスケープ・ダイバシティとランドスケープ・リテラシー～ということで話をしたいと思います。

私は造園という分野で公園とか緑地とか、それは都市の自然地も含めてなのですが、全部しておりますので、そういう部門でどんな議論をされているかということについてお話をしたいと思います。それではお願いします。

(P.2)

今日お話ししたいのは下にある3点で、1つは自然史博物館の問題です。それから2つ目は地域文脈の継承とか伝達とかという話ですけども、それから3つ目が地域コミュニティの再構築というような話です。

それで、これはみんな我々の分野で割と一般的に今考えられたり、進められたりしていますけれども、もう少し1歩2歩踏み込んで考えたり検討した方がいいだろうという趣旨でお話をしたいというふうに思います。

それで期待することということで、「100年先の「みどり」とこの100年に」ということですけれども、これもごく当たり前の話が並んでいます。東京都民が「みどり」の管理に参加しつつ、多様な自然と豊かに触れあうような、共生社会を実現する。そのことを通して東京に暮らすことの誇りとか、愛着を感じて、ふるさと意識ですね。帰属意識が醸成されていくような状況ができればということですね。

(P.3)

これは、東京都が非常に多様に富んだ自然に恵まれていると。ところが、あまり都民はそのあたりをちゃんと享受していないのではないかとということですね。先ほど自然史博物館、東京都さんの方でもデジタルミュージアムを進めておられるようで、東京にはたくさん資料館や博物館がありますけれども、通常の府県にあるような、東京都をテーマにした自然史博物館がないということです。それによって都民があまり東京の自然の事について知らないのではないかとということです。右下に南北東西の距離を書きましたけど、島嶼部があるので、東京は非常に広範な範囲を占めているということになります。実際に2000m級の山から、亜熱帯の島嶼まで非常に自然に富んでいるということです。

(P.4)

こうした自然のことを伝えるのはもちろん、実はもっと重要なのは、東京都民、真ん中にいる人達は、江戸東京の昔から自然に支えられてきた、深く関係を持ってきたということをもっとちゃんと伝える必要があるだろうということです。

ここにある通り、先ほど酒井委員から林業の話ありましたけれども、四ツ谷とか青梅の林業が昔から結構盛んで、東京の材木の供給源であったわけですね。その他にも炭とか水とか、あるいは漆喰が、それから絹とかですね。こうしたものがずっと人が住んでいるところに届けられてきていて、実はあきる野市とか五日市のあたりとか八王子のあたりというのは、そういう意味では経済的なある種の拠点だった、文化的にも拠点だった場所ですね。でも関わりが薄くなることによって、そこが地盤沈下してしまっただけで見えなくなっているという現状があらうかと思います。

(P.5)

海のほうも同じですね。左側の方の写真は、60年前の東京の様子ということで、大田区さんが今こういうことを広報されていますけれども、これは海苔粗朶の写真ですね。60年前、まだまだ東京湾、東京港というのは浅瀬だったということですね。ところがその後、国際港まで仕立てられてこられたわけですが、そういったことについてもちゃんと伝わってないのではないかと。

右下の写真は、われわれの分野で形成している緑地ですが、これは埋め立て地のところに淡水と陸域の緑の公園ができてしまっています。こういうことをすると、おそらく海が身近であるということが飛んでしまうわけですね。もう少しその辺りについてしっかりと考えた上で進めていく必要があるだろうと。

いつも言うのですけれども、横浜は皆さん港町だと了解されていますけれども、都民が港町であるということはあるお考えになっていないですね。やはり港との大きなハザードみたいなものがある、そういうことを踏まえて、2つ目、次の視点です。

(P.6)

これは従来、緑というのは、量的に都市域の中に自然との触れ合いを確保するというところで、左下の図にあります通り、量の確保が非常に大きな命題だということで、かつ、すべての人に公平に提供しなくてはならないということで、特に70年代ぐらいから急激に緑地の整備を進めることによって、非常に均質な緑が提供されてしまったというわけです。

ところが、右の図にありますとおり、これは上野公園ですけれども、上野公園にいろんな情報が実は目の前の中には組み込まれていて、その痕跡というのがまだまだ残っているのです。例えば江戸時代からお花見の産地で、今でも南の方は割と一斉にソメイヨシノが植えられていますけれども、実は北側の方は混植されています。混植されている、混植の状態が残っているのですけれども、江戸時代のお花見はその絵にある通り、常磐木と、それから秋の紅葉なども一緒に伐植されていたのです。

だから今のお花見というのは近代の形式だと言うことを理解させてくれるような痕跡もありますし、地方の噴水はですね、明治10年の第1回内国勸業博覧会において、高いところから水を噴き上げるという、ある種の技術の象徴として整備されたと永遠に残っているのです。そういったようなことについても、上野公園は非常にいろんな情報を持っているのですけれども、そういったことが十分に伝わってないだろうと。そういうことをしっかり伝えていくことが、これからの公園の役割ではないかということが、先ほどいった地域文脈の継承とか伝達ということです。それを進めることができれば、ランドスケープ・ダイバシティですね、それぞれの緑と公園というのが質の違ったものになってきますし、都民もそれをしっかり文脈を読み取れる能力とか、あるいはちゃんと情報伝達をして行く必要があるのではないかと、これが2つ目です。

(P.7)

一応、東京都の平地部から台地との境界部、それから台地の下、それから東京都の東西の境界の崖線の部分ですね。特徴的な緑地がありますので、そういったことについて多々あるという事例として、簡単にご紹介をします。

(P.8)

1つ目は、台地との境界部、これは大名屋敷なんかで残されてきたところですけども、東京大学の敷地ですね。有名な三四郎の池というのは育徳園という加賀藩の庭園からのものですし、それから1番右にある懐徳館庭園ですね。これは近代になってからの庭園もあるのですよ。いま総長の迎賓施設になっていますけれども、近代になって前田侯爵が、台地の上に水を最新式のポンプを使って水を回すというような庭園になっています。

それから2つ目、平地部ですね。これは前回小川委員からご発言があったようなことに近いですが、震災の記憶をとどめるプラタナスというのが下町にすごく多いですが、街路樹とか、あるいは公園の周りにプラタナス。現在はなかなかやはり葉っぱが多いというようなことで伐られがちですが、これは記憶の中だということです。それから小学校と公園が隣接した復興小公園というのがまだ残っています。

(P.9)

台地の上の話ですが、これは吉祥寺の駅の周辺、西荻から三鷹あたりまで非常に長い南北の街路があって、東西に短い街路、そういう街区が続いているのですけれども、その結果、左上にあるような庭木の緑がすごく長く続くような緑の風景が形成されます。これは実は近世の頭の頃のもので、新田開発のあとですね。それぞれの敷地の跡が外部の形として残っているのですけれども、こういったこともちゃんと伝えていく必要があるのではないかと思います。

(P.10)

先ほどの北南崖線があってという話ですが、国分寺崖線、お鷹の道のところです。ハケを中心に湧水があって、神社があって流れがあって周辺集落があって、それを利用するための階段とかもあってという。当時の暮らしをしっかりと伝えた方が良かったらというふうに思います。そのあたりが地域文脈の継承とかという話なのですが、最後に、やはり地域コミュニティを再構築していくうえでの拠点化を進めるべきではないかと思えます。

(P.11)

ここに掲げているのは、原生自然の保護と、それから二次的な自然環境の保全です。これは、まったく実は対応は似て非なるもので、人為をやっばり排除すべき生態の話と、適切な人為を継続しなくてはいけない話です。前回安藤委員からフリーライドの話がでてきたようですが、緑の管理というのは非常にお金も人手もかかる。新しい仕組みが必要だというあたりを認識してもらっても、公園というのが地域コミュニティの拠点であるべきだというふうに言われているのです。

(P.12)

この図は平成29年に東京都さんの方で出された都立公園の多面的活用の推進方策についてということで、私も議論に参加させていただいたのですが、その中で使われている象徴的なこれからの公園の図の1つです。エリアマネジメントの拠点にして行くべきだという考え方ですね。この辺りは右の中終盤に書いてありますとおり、現時点でいろいろな都市公園、自然公園に関わる法改正が進められていて、かなり大きなドラステックな変化の時期が来ているということです。

(P.13)

その拠点化をしていくということが、ここに3つ循環的に描きましたけれども、地域への愛着とか、誇りあるいは帰属意識との関わり。そのことがちゃんと管理をしていこうという主体意識の向上とか認識の向上ということとも繋がってくるだろうと思います。

そのことを考えていく時に、しきりにエリアマネジメントの話がされるのですけれども、どちらかというと仕組みのこととか、お金の話で、空間の話はあまりされてないですね。もう少し空間についてちゃんと考えていく必要があるだろうと思います。

私が今現在所属している國學院は、非常に神社といわれの深い大学で知見も色々あるのですが、実は神社はコミュニティの拠点だったところですね。そういったものから、もう少し公園がそれに変わっていくための類似性とか参考にすべき点というのをしっかり考えていく必要があるだろうということです。

(P.14)

次は4点、主にこんなことぐらいは考えるかということで、開放性とか柔軟性、多面性、集合・参加という話ですね。それから滞留・交歓というような生活インフラ。開放性、境界部、入り口の処理等含めて視認性を高めていくということや、それから特定の機能ではなくて、あまり特定のスポーツ施設みたいな限定された人しか使えないのではなくて、非常に多面的にいろいろな方が使えるものを導入するとした空間づくり、それから集合参加で地域の住民の人がいろいろグループで活動できるような場を提供して行くというようなことです。

それから最後は企業とかの支援です。官民共同の話があって、パーク PFI の話なんかもありますけれども、より滞留・交歓するサードプレイス化ということを企業の力を借りて進めていく必要があるのではないかという点です。

プレゼンテーションは以上です。ありがとうございます。

【佐久間計画調整部長】

ありがとうございます。続きまして渡部委員お願いいたします。

【渡部翠委員】

ありがとうございます。それでは私のプレゼンを始めます。皆様本日よりしく願います。

(P.1)

私は現在16歳、そしてチーフフューチャーオフィサー（Chief Future Officer）としてZ世代代表+α、皆様・専門家の前で、緑に関する専門家ではないけれど、今後、東京の緑の維持・管理とか、その先を作っていくところに関わる人間としての発言をさせていただきます。

2123年の東京都の時代に多分働いているのは、たぶん私の子供か孫くらいです。100年後の東京都で働いて住んで勉強して、そして遊ぶ人間になったつもりで提言します。

(P.25)

というわけで目指している東京都の姿というのは、笑顔があふれる街であること、様々な人が住みたいと思う場所であること、そして地震、水害・熱害など、災害から人を守る街であること。そこに貢献するのが東京都の緑なら、今後 100 年後に向けた東京都の緑はどうあるべきか、ということを考えてリサーチを行ないました。

そして私は私ひとりの高校生としての意見だけでなく、同世代の意見、そして周辺にいる東京都在住の方々の意見も聞いてみようということでアンケートを実施しました。

(P.3)

n=23 ですけども、回答者の 65%は 10 代以下のアンケートです。まず 1 つ聞いたのが、緑に囲まれていることは好きか、都市に緑があることは重要だと思うか。それは 100%イエスという答えでした。なので、一般人だとか、高校生から見ても、街に緑が存在するということは非常に重要なことで、必要とされていることだということがわかると思います。

(P.4)

ならばそれはどのように（緑を）増やすかとか考えた時に、今の東京都の強みや課題というのは何だろうということアンケートで聞き、東京都の建設局の方にお聞きし、リストアップしました。ちなみに今の強みとしては、治安の良さ、利便性、教育や情報の環境が良いこと、SDGs に関する取り組みが多いこと、意識の高い人が多いこと、街が綺麗なこと、そして緑地があることです。

今後の東京都の課題となるのがヒートアイランド現象、コンクリートが多くあることで生じる問題、そして、安全な公園が少ないということ、多くの人がよく緑化に関する取り組みをよく知らないこととして東京都にある緑地が飛び地のようになっていること、緑に関する事には多種多様な意見があり、一律に方針を定めることが難しいことが挙げられました。

(P.5)

私自身、このグリーンビズの活動に参加するまで東京都のイメージとしては、コンクリートジャングル、オフィス街と住宅街、住みやすいけれど緑が多いかと言えば怪しいというところでした。しかし調べるにつれて、都立公園だけでもすべて合わせれば港区と同じサイズになり、緑地ランキングでは第 3 位にくるような場所であること、そして東京都建設局の公園緑地部の方々をヒアリングさせて頂いて出た結論が、東京に緑はあり、都心でもそして都心でなくとも緑地は大量にあるということでした。

ならば、それがなぜ、このように認知の少なさだとか、物理的なアクセスの少なさにながっているかということ、緑地自体が分散し、人々が関わっていく中で、維持管理だとか、実際に手を入れるところまで来ていないことだと考えます。

(P.6)

こちらのグラフをご覧くださいと、東京都の都市緑地面積というのは、人口とほぼ同じようなスピードで増えているということです。ならば、緑地量に対して東京にそもそも住んでいる人の数やその人たちのアクセスだとか、その人たちの本当にみどりに対する関わり方がサステイナブルであるかということが問題です。

(P.7)

これは衛星データと google アースの写真をちょっと重ねてみたのですが、深い緑のところは森林だとか林だとか木が多くある所、浅い緑のところは草や原っぱ、そして建設から間もない比較的若い公園ですね。ご覧の通り、東京都の都市の方の緑は結構飛び飛びということが見えると思います。

私はこの緑を回廊で繋ぐことを提言したいと思います。東京都の課題として1つ、住民の方々が住むところ、そして既存の公園、川などの地形を考慮すると回廊を作れる場所が現状、車が通るところとか、交通に使われているところになると思います。そのような緑の回廊ができることに関して物理的にプラスになる点は、カーボンシンクとして気候変動に資する点、車と人との間に距離ができることで、安全が向上する点、そしてPM2.5などを排出する車が減ることでその都市部での大気汚染が減少する点などが考えられます。

しかし、それ以上に現状の緑の形では気候変動に対する対策だとか、災害に関する対策だとか、その場においての緑地の大切さが都民の皆さんに伝わっていないのではないかと考えます。緑地の重要性を住民に理解してもらえるようにするためには、そもそもアクセスというものを増やす必要があると考えました。東京都の緑地に関して、原生林などがあるのが多摩だとか八王子の方向だとすると、都心に作れるのは、人的な手が入った緑地だということは理解しています。

そのような場所では、水、大気、騒音、光の汚染にさらされ、人と共存するための伐採などの制限を受けて、生物多様性を維持できるか、環境保護の観点でそのような教育を受けられる場所が多数作れるかということ言うと、現状のままでは怪しいと考えます。

そのため、都市の自然空間を接続することによって、1つの豊かな生態系だとかを作ることができれば、より多くの人たちが緑の維持に関わるということを行い、そして物理的に東京都の二酸化炭素排出量を減らすとか、災害対策することができると考えます。

(P.8)

同じこの衛星画像を見てもらうと、多摩や奥多摩のエリアには充分緑があるのだから、そこに行けば都心に緑を求める必要はないじゃないかという声も上がりました。しかし、1つ問題はそこまで行ける人ならきっと、多摩や奥多摩のエリアの緑にアクセスすることができるとは思いますが、そこまで時間やお金の問題でいけないという人たちに対しては、緑地のアクセスに関する格差を生むことになります。

私自身、シングルマザーの家庭で親がフルタイムで働いており、小学校時代に東京に住んでいた間、1日はほとんど学校と学童の行き来、そして家でした。緑に関する活動だと

か、学びの環境というものは、学校を通して参加する機会以外は家族で行くような時間もあまりとれませんでした。

原生の緑地から遠いところに住む人がそういう環境保護だとか、気候変動に対する緑地の重要性というのを理解できるような環境が今の東京の都心にあるのでしょうか。この問いに対して私は「ない」と答え、緑、なおさら緑の回廊というものが必要だと考えます。

そして土日や休日ならいけるじゃないかという声もありましたが、その場合、多くの人にとって緑は特別なモノになってしまいます。休みの日には、公園などの少ない緑地の場所に多くの人が集います。夏に近くの公園に行くと、人の多さにげんなりしたことがある方もいらっしゃるのではないかと思います。文字通りにも比喩的にも呼吸できる空間が乏しくなるということを考えると、より身近な場所に緑地があるという環境をつくる必要があると強く訴えたいと思います。

(P.9)

こちらは海外の前例でシンガポールの例なのですが、海外での自然公園や保護区、英語で park reserves など繋ぐ形のネットワークづくりが進んでいます。車を入れることなく、自転車や徒歩で歩くということを重視したトレイルだとか住宅地の間を縫って公園と公園の間をつなぐ緑の回廊が作られています。

このような活動を通して、主要な公園の近くに住んでいなくても緑地へのアクセスが向上されるというのがありますが、緑地が増えれば維持にかかる人手や費用も増えます。その場合、緑の回廊なんてできたってどれだけお金がかかるのか、どれだけの人手が必要なのかという問題が生じます。シンガポールの例では、多くの高齢者の方々が緑地の整備だとか、例えば公園の清掃、道路沿いの落ち葉集め、動ける間は働くようなスピリットで維持管理に関わっている人が多いと感じました。

これは以前、わたしがマレーシアに住んでいた時に、シンガポールに行った際に、公園で見ていた風景です。東京都の場合、そういう人がどれだけその場で働いていて生活していて、そのうち何人がボランティアとしても仕事としても緑地の整備というものに関わってくれるのか。東京都の建設局の方々にヒアリングを行った時も、現状で既に維持管理に係る人手が足りないため、そういう緑地の増加というところに一番に立ちはだかる問題は人ということが分かりました。

(P.10)

そこでアンケートを通して、東京都に住んでいる方々がどれぐらい緑地の活用だとか、環境に関する取り組みを認知しているかということを知りたいと聞いてみました。0 が全く認知していない、5 が非常に多く、もしくはそれ自体に関わっているという状態について聞いてみました。

ご覧の通り回答数が多いのは1と2の間というわけで、認知度は低いほうだと考えていいのかなと思います。これは今後、東京都の緑地を増やすことを考えると、人を雇うよりは個々が環境の専門家になる、もしくは緑地の手入れに係る環境をつくり、コミュニテ

いの者として東京の緑に関わっていく必要があると思います。そのようになった世界線を作るためにどうしたらいいかということを考えました。

(P.11)

反対にこのようなものに関わる意欲はあるのかと聞いてみたところ、それに関する答えは3から5、4のあたりが1番多いです。0が全くない、5が一番多いとした場合です。なので、緑地だとか、環境に関する取組に関心がある人、関わりたいと思っている人は比較的多い。ならば、その人たちが参加しやすくする必要がありますと考えました。

(P.12)

これは「まちのコイン」というシステムを元にしたアイデアです。現在私は長野県の軽井沢町という場所に住んで寮生活を行っていますが、近くの小諸市で使われているシステムです。

個人や営利企業、行政など人手が欲しいところや人が来てほしいことに関して何かしらアクションしてくださいという投稿を行い、それに実行すると報酬として、オンラインでコミュニティの通貨がもらえます。その通貨を得ることで、お店で何かしらディスカウントがあったり、 $+α$ で素敵な商品がもらえたりします。

東京都の緑地事業に関わることにしても、ニューヨークのようなグリーンマップがあればというアイデアがありましたが、そのグリーンマップと組み合わせて、このコミュニティ通貨のシステムなどを使えば、より多くの人が気軽に、じゃあこのアクションをするぞとオンラインで必要なことを認識し実行し、対価をもらい、その緑化の事業に関わることができると思います。

こちらで、自己消費ではなく地域のNPOへの支援に使われるシステムと書いたのは、対価をもらうことにコミュニティ通貨だとか、自分にお金が戻ってくるようなシステムにすると、そのためにコミュニティに貢献するという人も出てくるかもしれません。地域のNPO支援に使うとなると、緑化に関わりながら、また他の活動に対して東京都で支援を必要とする人達の下に自分の行ったことが還元されます。

このような2倍3倍にプラスの影響が連鎖するようなシステムを魅力的に感じるのですが、最近意識の高い人が多い東京都では必要なのではないかと考えました。オンラインのシステム、自己消費ではなくNPOへの支援に使う、(コイン)売買で人を巻き込むことができるシステムを活用すれば、東京都での緑地に関わることはプラスにつながると考えるトレンドを作れるのではないのでしょうか。地域だけでなく、自分が住んでいるコミュニティにプラスになるというものを作れると思います。

(P.13)

100年後の東京の緑にはどうあるべきか。災害に関すること、緑地というものがどうあるか、どういうものなのか、みどりに関わる生活というのはどういうものなのか、このアンケートやヒアリングを行っていけば行くほど持続可能性、緑化、緑があるということに対して、感覚や意見は人によって全く違うということが見えてきました。

なので、当たり前には人の多様性や緑のバランスというものが重要になりますが、そういうその人たちが持っている時間や目指したい人生に、東京に緑地が増えるということがどう貢献するか示していかないといけないと思います。

道路をそのまま緑の回廊のスペースにしたらどうかという結構過激な案も提案しましたが、1つ分かるのは、東京都のような人口のサイズの場所で、最大公約数的な東京都の緑はどうあるべきかという答えははっきりわかることはきっとないと思います。

(P.14)

ならば、この多種多様な意見や視点を統合する目標作りに役立つのは、現状から今後100年後に向けて何が求められているのかということです。アンケートでどういう要素が揃っていれば街に住みたいと思うか、都市に住みたいと思うかという理由を聞きました。その理由のTOP3は治安の良さ、交通の利便性、そして住むことに関するコストオブリビングでした。

(P.15)

東京都に限定して将来東京に住んで働きたいかと言うことを聞いてみたところ、いいえ、もしくはどちらでもないという答えが1番多かったです。東京の最大の資産は、きっと、人とアイデアが集まる街であること、日本の中でも流行を設定するような場所であること、江戸時代から大都市としてやってきた強みではないでしょうか。

私と同世代の10代の皆さんは全員どちらでもないと答えた人がほとんどです。私たちは最も安心して健康に充実した人生を過ごせる場所はどこか見定めようとしている。その中で東京が真っ先にイエスと呼べる場所でないのなら、そこをイエスという状況に作ることは、きっと100年後の東京都に価値をつくるものではないでしょうか。

Z世代代表として、さまざまな人たちと関わってきて、私たちの世代は環境負荷、そして精神的、身体的なウェルビーイングが保障される街、そのような人生を送れることを重視しています。どんなに人生において成功していても同じだけ不健康で同じだけ他人に負荷をかける、環境に負荷をかけるような人生を送りたくはない。東京に住むことで、その3つのウェルビーイングが保障されるような文化を今から作ることができれば、新しい100年後に関する東京の緑の文化が作れるのではないのでしょうか。

今後円安だとか、都会にチャンスを求める人たちがより増えること、日本の中でも人口の中で、日本人と国外から来た移住者の方々の割合に変化があること、そして気候変動によって毎年夏は暑く、そして高温多湿の状況が続くこと、このような課題に対してなおさら、今まで通りの生活を求める人は減っています。

(P.16)

これは最後のスライドですが、バイオフィリックデザインと英語では言いますが、自然との共生が街の建築やデザインに組み込まれた状態が今後、より当たり前になってくるのではないのでしょうか。

海外ではおそらく皆さんもご存知の通り、そのようなデザインの仕方を踏まえて、どのように街を作り、経済を回し、人を呼び込むかということが始まっています。ならば東京は今までの歴史を踏まえ、水と緑の街として緑化を通し、人と人との間のつながりを強化し、新たに学べるものを作り、100年後に国際的に名を馳せるような緑の多い街になってみせるところを見たいと思います。

皆さんからの質問や提案をお待ちしております。ありがとうございました。

【佐久間計画調整部長】

ありがとうございました。ここまで公開は以上となります。プレスの皆様、ご退席をお願いいたします。